

外山滋比古

# 日本の文章



外山滋比古（とやま しげひこ）

1923年愛知県生まれ。東京文理科大学英文科卒業後、母校で教壇に立つかたわら、雑誌「英語青年」の編集長も兼ねた。現在、お茶の水女子大学教授。著書に『修辭的殘像』『近代読者論』『エディターシップ』『異本論』『日本語の論理』『省略の文学』『知的創造のヒント』『フィナーレの発想』『昨日は今日の昔』『新・学問のすすめ』などがある。



講談社学術文庫

定価 540円

---

## 日本の文章

外山滋比古

昭和59年8月10日 第1刷発行

発行者 山本康雄

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 株式会社国宝社

© Shigehiko Toyama 1984

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

---

ISBN 4-06-158648-3(0)

(衛E)

# 日本の文章



## 「学術文庫」のためのまえがき

言葉は正しくつかえなくてはならない。そして正しく書き、話すことは、なかなかたいへんである。けれども、これだけでよいとしてしまうのは、すこしさみしい思いがする。

お互い、言葉によつて生きていることを考えると、おもしろい言葉をつかえるようになりたい。

おもしろい、といつても、おもしろおかしいのではない。とくに笑いをさそうようなものでなくても、おもしろい言葉はある。心に響き、心にしみるのが、ここである。おもしろさである。

そういう意味でおもしろく、正しい言葉に関心をもつて書いたのが、この本に収められた諸篇である。

「日本の文章」という題名から、文章の書き方を想像する向きがあるかもしれないが、われわれの文章が、どういうものであるかを考えたものである。

文章といえ、文字だけの言葉、声を失った表現を考えがちなのが、これまでの日本である。文章も言葉であるから、肉声と縁を切るわけにはいかない。ここでは耳で読む、耳でも読める文章に注意している。そこから新しい日本語のスタイルが生まれるかもしれないと考える。

北斗出版から出たこの本が、この文庫に入ることになったのを、快く許可された北斗出版の方々の友情に感謝する。

こんど新しく富岡多恵子さんの解説をいただくことができた。富岡さんはかねて尊敬している文章家である。そのご好意をとくにありがたいと思う。

本になるまでに、講談社学術文庫編集部の池永陽一氏と布宮みつこ氏から、いろいろお世話になった。

一九八四年六月

## 目次

|                                        |     |
|----------------------------------------|-----|
| 「学術文庫」のためのまえがき                         | 3   |
| 「私」のいない世界                              | 11  |
| 耳で読む                                   | 16  |
| 清水 <sup>せみすい</sup> に魚 <sup>い</sup> すまず | 21  |
| 日本の文章                                  | 26  |
| 知的散文                                   | 41  |
| おもしろさ                                  | 53  |
| 「が」の問題                                 | 65  |
| 間 <sup>ま</sup> とゆとり                    | 78  |
| 先生の書く文章                                | 88  |
| 楷書と行書                                  | 100 |

愉たのしきかな手紙 ..... 112

打てば響く返事 ..... 127

ほほえみをたたえる ..... 133

話しかける気持ちで ..... 139

漢文に学べ ..... 145

TV・オア・ノット・TV ..... 151

“すばらしいでした” ..... 154

国語の辞書 ..... 157

新しい文体の舞台 ..... 160

書き出しの文章 ..... 167

タテとヨコ ..... 176

短い文章 ..... 180

言葉の世界 ..... 183

構造的翻訳 ..... 190



|           |     |
|-----------|-----|
| 名訳受難      | 195 |
| 文体のことなど   | 205 |
| “引用”ということ | 210 |
| 書けない言葉の教育 | 215 |
| あとがき      | 236 |
| 解説        | 239 |
| 富岡多恵子     |     |



# 日本の文章

本書は、北斗出版刊『日本の文章』（一九七九年、初版）を底本とし、著者の了解のもとに随時ルビを振りました。

## 「私」のいない世界

日本語の文章の泣きどころは文末にある。ヨーロッパ語のセンテンスは多く名詞で終わるから、どんな変化でもつけられる。日本語の文は動詞が終わりにくる。どこの言葉でも、名詞より動詞は数がすくない。ことに、基本動詞となると、かぞえるほどしかない。日本の文章はうっかりしていると「である」の羅列<sup>られつ</sup>になつてしまふ。「であつた」がしつように繰り返されてうんざりさせられる。

漱石<sup>そうせき</sup>が名文家であるのははつきりしているが、「た」で終わる文がえんえんと続いて、催眠術にでもかかったような妙な気持ちになつたことを覚えている。構わぬ人で、当て字などものんきに使つたから、「た」が重なるくらいのは平気だったのかもしいれない。それにしても、もうすこし、どうにかならなかつたのか、と感じる耳をもつた読者もすくなくないはずだ。文名がその声を抑えているように思われる。新聞なども文末語尾に気を遣っているらしく見受けられる。このごろ「である」

はすたれて、もつぱら「だ」が愛用されている。別にそれがいけないというのではないが、好みを言わせてもらえば、「だ」の音はどうも美しくない。文章は飛ぶ鳥ではないから、終わりを濁さないようにしろ、などと言うつもりはない。しかし「ある」という澄んだ響きに比べて「だ」というのは、太った中年女がいぎたなく膝を崩してべったり座った感じがしないだろうか。新聞、雑誌はデブ女が好きなら、しかたがない。

終わりよければすべてよし。日本語の難所は文末なりというのはいまや常識としてよからう。

ところで、もうひとつ厄介なことがある。第一人称単数をどうするか。どうもこうもないではないか。私、ぼく、わたし、われわれ、おれ、などいくらでもある。

「わが輩」を使う政治家もある。みどりよりどり、ご自由になっている。英語など、女王さまから乞食まで、ひとつの代名詞を使っているのに比べてこれはまた、何とけんらん多彩なることよ、と感心することもできる。

（それにしても、「われわれ」を第一人称単数の中に入れるのはいかなものか、と考える人がいるかもしれないからひとこと付言する。「私」では具合のよくないと

きに、「われわれ」を代用することは英語などでもみられるところで、国王や編集者、医家などがそういう「われわれ」を使う。日本の商人が「手前ども」というのもそれに近い。）

（さらに、付言すると、この原稿、はじめから、ここまで、地の文章では第一人称単数を一度も使っていない。かりに英語でこういうことをしようとしても、不可能であろう。）

このごろ、文章の中で「ぼく」を気軽に使う人がふえてきた。明朗でいい。ただ、それならそのお仲間入りをしようか、という気持ちになれない。遠くから、ああいう文章が書けたらなあ、と羨ましくうちながめるにとどまる。第一人称に照れる。それが在来の日本語の感覚だったのではないかとひそかに考える。

「ぼく」がぼんぼん出てくる文章を見ると、元氣のいい青年教師が口角泡をとばして生徒を教えている姿を連想する。すこし声が大きい感じがする。「ぼく」を好む人は、しばしば「なのだ」という強い調子で文を締めくくる。自信家なのかもしれない。

あるイギリス人の物理学者が、日本人学者がよく論文の中で「であろう」という

文を書くのを批判したことがある。科学的論文なら「である」とすべきで、「であるう」ではいかにも自説が根拠薄弱こんきよはくじやく、データ不十分だと言わんばかりではないか、というのである。

学術論文はともかく、一般の文章では、必要もないのに、高飛車たかびしやに「である」などときめつけられるのはうれしくない。一枚ベールをかけて「であろう」とぼかした方がゆかしい。「ぼく」は「なのだ」といった調子は論外という気がする。しかし、こういうことは要するに好みの問題、論議してはいけないのかもしれない。

最近亡くなったある文学者が第一人称の使用についてたいへんシャイ（訳語なし、この場合、慎重、とでもしておくか）であつた。そのことひとつで、この人の文章に親しみを覚えた。

そんなことを言うが、「私」や「ぼく」を使わないでは文章が書けないではないかと反論される可能性はある。なにも絶対にいけないと言おうとしているのではない。ぎりぎりの必要なときだけにしてほしいと思うだけである。そのつもりになれば、第一人称単数は、ラテン語と同じように、動詞の中へかくすことができる。それが日本語のおもしろさか。



近代の日本文学で栄えた「私小説」は、「私」のいない文章を書く人が多かった時代、社会だから有効な様式であつたとも考えられる。ネコもシャクシも胸を張って「私」「私」と言うようになっては「私小説」も顔色なし。

まして、「ぼく」を連発するような人たちにとって、ヨーロッパがそうであるように第一人称小説なんて意味をなさない。だいいち「ぼく小説」なんて、いかにもしまらないではないか。